

令和3年8月4日
外部専門家との意見交換会

畜産総合研究センター令和4年度新規予定課題意見交換結果

		外部専門家氏名	杉戸 克裕 河本 英憲 平子 誠
		試験研究機関長名	富田 耕太郎
研究課題名	大家畜経営におけるICTを活用した繁殖管理システム導入による経営改善効果の検証	研究期間	令和4～5年度
外部専門家からの意見・指摘事項	○現在、繁殖管理システムは色々と導入されているが、経営分野ではなかなか事例研究が進んでおらず、大変タイムリーな課題であり重要な課題であると思う。 ①課題のタイトルは「経営改善効果の検証」であるが、研究成果の波及効果については「システム導入に当たって必要な条件を明らかにする」とあるため、経営改善効果を示すことから更に一步進んだ研究内容になるかと思うが、実際のところどこまで対象としているのか。 ②戸別農家の選定基準はどのように考えているのか。 ③満足度は農家のレベルにより異なってくると思うが、そういう点も分かるような形でデータを収集した方が良いと思う。		

《対応方針等》

- ①基本的には聞き取り調査等により経営改善効果を示し、事例数が多く取れば条件分けをし、このような条件ならばこのような経営改善効果が得られる等、成果を示せばと考えている。
- ②システムを使いこなしているかと言う点で選定していきたいと考えている。酪農経営で6戸、肉用牛経営で6戸程度は確保できるのではと思っている。更に、事前の県内での評価の中で、失敗事例も調べて欲しいとの要望があったため、それについては戸別調査ではなく実態調査において深掘りしていきたいと考えている。
- ③農家の意識は経営的な概況に絡めて収集していきたいと考えている。

畜産総合研究センター令和4年度新規予定課題意見交換結果

		外部専門家氏名	杉戸 克裕 河本 英憲 平子 誠
		試験研究機関長名	富田 耕太郎
研究課題名	交雑種去勢牛における自給飼料を活用した肥育期間短縮技術の検討	研究期間	令和4～6年度
外部専門家からの意見・指摘事項	<p>○濃厚飼料が高騰しており畜産経営で自給飼料を確保するということは、非常に理にかなった仕事と思う。</p> <p>○CSは稲わらと物理性が異なるため、ただNDFの含量を測るのではなく、切断長を検討する必要がある。乳牛では切断長を短くしてDMIを増やしていこうとしているが、肥育牛ではどうなのか。肥育牛に多給する際の切断長については、しっかりと測定していかなければならないと思う。</p> <p>①実際に活用されている農家は、今回の試験設計のように前期に与える場合も相当な量を与えているのか。</p> <p>②肥育農家でCSを自給飼料として生産し給与していくに当たって、実際に生産余力はあるのか。</p> <p>③CSの切断長は測定し、調整していくのか。また、実際、農家さんたちが使っているCSはどういう状況なのか。</p> <p>④肥育期間の短縮が課題となっている中、試験区の3区とも短縮した形での比較となっているが、短縮の経営的効果をどのように示すのか。</p>		

《対応方針等》

- ①県内では何軒かCSを活用しており、その中の一軒の事例では、今回の試験設計のように半量近く給与しているのではなく、1～2割程度の給与であった。また、その農家では稲WCSも活用していた。ただ、肥育中期以降は肉質を懸念して給与はあまりされていない状況である。
- ②酪農家では機械を揃え、また、コントラクターが県内でも徐々に増えてきている。最近では、肉牛農家でもコントラクターを作ってCSを自分たちで実際に作っていきこうという事例も県内の中で出てきている。自家生産やコントラクターのグループの中でCSの流通等も始まっていれば活用に繋がると思う。
- ③試験に当たり、切断長や収穫時期は調整しながら、サイレージ調製を行いたい。実際農家での生産状況を見ると、ハーベスタの手入れ等が足りず、かなり細断が良くないものがあったり、CSそのものがあまりよろしくないものも見受けられる。そういうことも踏まえて今後の成果の中で情報提供していければと考えている。
- ④全ての試験区で出荷は24ヵ月としているため、評価が難しい部分はあると思う。場内では早期肥育の違う試験もやっているため、従来行ってきた試験の成績書と比較して、肥育期間短縮による経済的評価を行いたいと考えている。また、CSを使うことで飼料費そのものは削減できると思われるため、そこはしっかりと評価していきたい。

畜産総合研究センター令和2年度完了課題意見交換結果

		外部専門家氏名	杉戸 克裕 河本 英憲 平子 誠
		試験研究機関長名	富田 耕太郎
研究課題名	ホルスタイン種における経腔採卵による採卵成績への暑熱の影響	研究期間	令和元～2年度
外部専門家からの意見・指摘事項	<p>○1回当たりの発生数が少ないのが気になる。胚移植研究会等での発表を参考にして発情周期のある決まった時期に試験を行うともっと成績が良くなると思われる。</p> <p>○1回当たりの発生数が少なくても、OPUで回数を重ねた方がトータルとして過排卵より多く採れるので、そういうやり方もある。</p> <p>① OPUをやる時は、牛の発情周期の特定の日に合わせてやっているのか。</p> <p>②卵胞発生の誘起をしないOPUは、間隔を短くできるというメリットがあるが、今回のOPUについては、同じ牛でどれくらいの間隔でやっているのか。</p> <p>③成績書で、残された問題とその対応のところに「なし」と書いてあるが、今回の成績を見るとまだ工夫の余地があると思う。これは、課題として取り組まないから「なし」となっているのか。是非もう少しアイディアを出して工夫してみて、倍ぐらいに行ければ良いと思う。</p>		

《対応方針等》

- ①今回の試験では、特に発情周期に合わせてはやっていない。実際に当所でOPUを行う場合には発情時期を管理して行っていなかったため、任意の時期に行った。
- ②同じ牛で2週間から3週間程度でやったが、必ずしも全部が2回続けてやっているわけではない。暑熱期と適温期でやった牛については、同一の牛でない場合が多い。
- ③最終的には改良の価値はあると思うが、今後、まだ具体的に何に取り組んでいくか明確になっていないために「なし」となっている。

令和3年度外部専門家との意見交換会課題

		研究室	課 題 名	概 要
1	新規 予定 課題	企画 環境	大家畜経営におけるICTを活用した繁殖管理システム導入による経営改善効果の検証 (令和4～5年)	大家畜経営において、発情検知や分娩監視等の繁殖管理システムを導入する際の経営判断の材料とするため、県内の酪農、肉用牛経営における導入事例を調査し、導入のメリット・改善点を明らかにするとともに経営改善効果を検証する。
2	新規 予定 課題	乳牛 肉牛	交雑種去勢牛における自給飼料を活用した肥育期間短縮技術の検討 (令和4～6年)	本県で一般的な自給粗飼料であり、消化性や嗜好性に優れたトウモロコシサイレージを利用した飼料メニューを検討し、交雑種去勢肥育牛において肉質及び枝肉重量を落とさずに肥育期間を短縮するための技術を開発する。
3	完了 課題	嶺岡 乳研	ホルスタイン種における経膣採卵による採卵成績への暑熱の影響 (令和元～2年)	暑熱期は過排卵処理によって生産した体内受精卵の採卵成績が低下するため、暑熱期に新鮮卵を供給する手段として、経膣採卵一体外受精(OPU-IVF)の可能性について検討したところ、暑熱期のOPU-IVFは、乾乳供卵牛、育成牛及び搾乳牛のいずれにおいても受精卵生産数は低下するものの、受精卵の生産は可能であった。